

小手姫の巾着

昔、川俣に底なしといわれた清水沼というところがあり、この沼のほとりに芋作という百姓が住んでいた。この芋作は百姓のかたわら清水沼に祀ってある小さな祠の杜守りとしていたのであるが事情あつて、この杜守りができなくなり、ある日突然祠に祀つてあつたという小さな「巾着」を持出し流浪の旅をする身となつたのである。

それから、その巾着がどのようになって人から人へと伝わつていったかは明らかでないが、流れ流れて御代田村御山下のある家に入ったということであつたが今は、川俣の某神様に収つてゐることである。

この巾着には、次のような話が伝えられている。この頃御代田の冬山というところに山村某なる者が住んでいたが、この山村某の家は没落寸前だつたという。そこに、ある流浪の百姓風の男がその家を買いつて移り住むようになった。そしてこの人が大事にして持つていた巾着を天井の梁にくくりつけ「これは決して見てはならぬ、見ると目が潰れる」と代々言い伝えられ誰も見た者はなかつたという。

巾着はまたその後どのような事情でかは明確でないが、不思議にもまた川俣の人の手に渡りいまは、某神社の宝物「小手姫の巾着」として奉納されているという。

因みに、この巾着の中味は一体何であつたのだろうか、仄聞するに、石の玉が一つと巾二寸位の経巻が一巻、そしてその石には五匹のカニの化石が付着してゐたということである。